

# Jean-Paul Sartre の 《LA NAUSÉE》について

——その *absurdité fondamentale* を中心にして——

辻 昭 臣

Albert Camus が、1938年10月20日付けの *Alger républicain* に発表した《LA NAUSÉE》de Jean-Paul Sartre と題する試論は非常に先駆的であると同時に有益な示唆に富んだものである。取り分けその書き出しの部分<sup>1)</sup>が、後の *Le Mythe de Sisyphe* における「不条理な創造」の論理の萌芽的な考え方を含んでいて誠に興味深い。

Un roman n'est jamais qu' une philosophie mise en images. Et dans un bon roman, toute la philosophie est passé dans les images. Mais il suffit qu'elle déborde les personnages et les actions, qu'elle apparaisse comme une étiquette sur l'oeuvre, pour que l'intrigue perde son *authenticité* et le roman sa vie.

Pourtant une oeuvre durable ne peut se passer de pensée profonde. Et cette fusion secrète de l'expérience et de la pensée, de la vie et de la réflexion sur son sens, c'est elle qui fait le grand romancier.<sup>1)</sup>

ここで問題になっているのは言うまでもなく「哲学的な小説」のことである。Camus の論証は小説と哲学の反発という古典的な迷妄を打ち破っている。哲学的な小説に不可欠の要素は「深い思想」である。あらゆる哲学的な作家はこの思想を描写するための素材として、*image* と *idée* を駆使する。

---

1) Albert Camus: *ESSAIS* (Biblioth que de la Pléiade, P. 1417)

image と idée は相互に浸透しあうことによって、お互いの機能を助けるという相関関係にある。しかしここで注意しなければならないことは、image が idée に対して常に優越性を保っているということである。image と idée との程よい調和こそが自足した小説世界を構成するための必須の条件なのである。なぜならば、image とは idée の肉体化したものであり、優れた哲学的な小説は、image と idée との接点に成立していなくてはならないものだからである。小説においては、image が喚起する経験や登場人物や行為の具象性が豊饒であればあるほど、idée だけによる壊血病的な描写よりも、人間の真実が語られる。人間が自らの実在を確認するのは、肉体や心情や感覚などの具体的なものの顕示においてであって、それらの apparence の中に隠匿された idée においてではない。

ところで《LA NAUSÉE》においてこの image と idée との関係はどのようなになっているだろうか。Sartre の驚嘆すべき哲学的稟性は、それと同じほど優れた文学者としての資質をかなり凌駕している。その結果、《LA NAUSÉE》においては比類なく多様な images の間から、彼の思想を裏付ける idée が図らずも露出している。しかし彼の堅固な意志の持続と柔軟な想像力がその idée を彼の思想の「貼札」に墮落させることを妨げている。

文学作品が成立した後に、その中の種々雑多な images を解析して、そこから様々な想念を抽象して分析、総合するのが文学研究の大きな使命であるならば、《LA NAUSÉE》のように作者が自らの思想の具現を企てた作品においては、images の間から露呈している idée を彼の他の哲学的作品の支援を得て解読するのが最良の méthode である。すなわち Sartre の脳髓でいったん収斂された idée が作品においてどのように拡散しているかを読み取ることである。そうすれば学問的な真理、すなわち image と idée が融合された全体的な統一が湧出してくる源が解明されるに違いない。

あらゆる文学者の関心が極力集中するのは *réalité humaine* の真正さに対してである。文学の最大の任務が人間の生命を洞察することにあるとすれ

ば, *réalité humaine* の第一義的なものは生命の証でなければならない。また *réalité humaine* は, 人間と世界との相関関係によって成立する。人間が生きることを意味は, 世界の中において現実との直接的な係りを最大限に実感することである。そして生きることの一部を成す文学活動とは, *réalité humaine* を獲得するための精神の冒険に他ならない。従って文学作品が我々に与える感銘の深さは, *réalité humaine* がいかに生き生きと描かれているかという度合に比例する。*réalité humaine* に対する作者と読者の要求の強さという共犯関係のうちに作品は成就するのである。しかし *réalité humaine* は一種の不可能性によっていつも脅かされている。人間が *réalité humaine* の真正さを捉えようと試みても挫折するのは, 人間存在に内在する否定性のためである。

*réalité humaine* の否定的側面の契機となるものについての Sartre 自身の解明は次の通りである。

Il existe au contraire de nombreuses attitudes de la «réalité humaine» qui impliquent une «compréhension» du néant : la haine, la défense, le regret, etc. Il y a même pour le «Dasein» une possibilité permanente de se trouver «en face»<sup>1)</sup> du néant et de le découvrir comme phénomène : c'est l'angoisse.

ここに「存在と無」に関する最も重要な問題の提起がある。Sartre が《LA NAUSÉE》において最も執拗に描いているのは, *réalité humaine* の支柱を成す *existence* についてであり, 後に *L'être et le néant* で精妙極まりなく分析された問題点のほとんどすべての萌芽状態をここに見出すことができる。

すべての事象を検討するのは「反省」*réflexion* という意識の一作用である。反省こそが対象を把握するための知的媒介物となるものである。しかもその最大の役割は, 意識の網の目に掛かった *objets* の真偽を判定すること

1) *L'être et le néant* (Bibliothèque des Idées, P. 53)

にある。しかし先ず最初に *objets* を捉えるのは直感の働きである。そしてこの反省以前の精神作用のうちでもなかならず「驚き」*étonnement* という情緒的な作用こそが、意識にとって最も関心のある *objets* を捉える力の最も強いものである。驚くことなしには新しい発見はあり得ない。

ところで、把握すべきものが「無」*néant* という形で現前した場合、意識はどのような反応を示すだろうか。それは Sartre 自身が前の引用文で述べている「不安」*angoisse* という、これもまた精神の情緒的な作用に他ならない。不安は何かに押し潰されるような下降意識ではない。不安は自らのうちに含む *négativité* を充足させるために常に更新されなければならない運命にあるから、意識が *objets* を把握するための飛躍台の働きをする。不安こそあらゆる認識と生命活動の源泉と成り得るものである。以上の「反省」という精神の知的操作と、「驚き」と「不安」という情緒的な媒介物を使っての意識の働かせ方こそが、Sartre の、すなわち取りも直さず *«LA NAUSEÉ»* の主人公 Antoine Roquentin の認識の方法の最大の特徴である。

Antoine Roquentin の全体像を構成しているのは言うまでもなく彼の精神と肉体であるが、この極度に内省的な人物にあっては彼の精神の働きが彼の行為よりも常に先行している。彼の自我はあくまでも内面的に生成していくだけで、社会とは何らの関係も持たない。社会化しない自我は行為においては選択しない。社会化された自我とは個を貫いた普遍性を持った自我のことである。Roquentin の自我が我々を説得するだけの普遍性を獲得するための必要条件は、彼の意識が自らを超出することである。

ここでは彼のの超出の仕方と方向を知るために、彼の存在様式がどのようなものであるかを検討してみなければならない。先ず彼は自らの存在理由を根拠付けるために、Descartes以来継承されてきた*cogito*を思考の根底に置く。

Je suis, j'existe, je pense donc je suis ; je suis parce que je pense, pourquoi est-ce que je pense ? je ne veux plus penser, je suis parce que je ne veux pas être,<sup>1)</sup>....

1) *LA NAUSEÉ*, P. 130

極言すれば Roguentin の唯一の存在様式は「考える」ということである。しかし彼の意識は認識の領域に停滞することはできない。彼の意識は不安に直面しそこから脱出せざるを得ない。この不安が次の思念を生み出し、その思念が更に新しい不安を生み出す。このように無限に繰り返される脳髄の機械装置が超越の基本構造を成すものである。しかしこのからくりも突然止まることがある。それは意識に思念が即自的に纏わりついた場合である。その時意識は超越することが不可能となり、思念は石化する。Roguentin の明晰な意識はこの精神の弁証法的発展が渋滞しないように常に警戒していなければならない。しかし疲労が思考の残滓となって脳漿に激む時、彼の思念は味けないものとなる。彼の懐疑的な精神が思考の可能性の限界を悟るのはそんな時である。それにもかかわらず彼の真摯な精神作用が認識という血路の歩みを留めることは決してない。

知ることが認識の領域の中だけに閉じ込められて行為や精神の糧としての有効性を持たないものが「教養」である。Sartre は教養に対してひどい嘲笑を浴びせるために、「独学者」Autodidacteという極めて滑稽な人物を登場させている。彼は《LA NAUSÉE》における数少ない登場人物の中でも特異な存在である。彼は内省と自我の中に閉じ込もっているという観点からすれば Antoine Roguentin の分身である。独学者は Roguentin 自身かそうだったかもしれないが、そうってはいけない人物である。彼は内省の極限状態における認識至上主義者である。彼は書物に対してだけしか現前しない。彼の研究方法は極めて独善的なものであり、彼の脳細胞に刻印される知識は不統一極まりない。彼は教養の無力さに対してはこれっきりの懷疑も抱かない。彼は知識人の caricature に十分成り得ている人物である。

社会化しない Roguentin は飽くまでも孤独である。しかし彼の孤独には涙の影はない。孤独は彼にとって内省の必須の条件なのである。彼の明晰な意識は存在の探求を止めない。彼の存在の自覚に対して初期衝動を与えるのは日常生活の「倦怠」ennui である。倦怠は何も彼に固有のものではなく、

ロマン派の文学者によって発明されて以来独自の役割を果してきた。しかし《LA NAUSÉE》において倦怠が独創的な形態をとるのは、倦怠が存在にまつわる色々な要素を開示するという点にある。倦怠は生理的媒介物としてまっ先に *nausée* を開示する。果して *nausée* とは一体何なのか。Sartre 自身がそれに次のような定義を下している。

Il va sans dire que nous avons choisi la douleur physique à titre d'exemple et qu'il y a mille autres façons, contingentes elles-mêmes, d'exister notre contingence. En particulier, lorsque aucune douleur, aucun agrément, aucun désagrément précis ne sont «existés» par la conscience, la pour-soi ne cesse pas de projeter par delà une contingence pure et pour ainsi dire non qualifiée. La conscience ne cesse pas «d'avoir» un corps. L'affectivité coenesthésique est alors pure saisie non-positionnelle d'une contingence sans couleur, pure appréhension de soi comme existence de fait. Cette saisie perpétuelle par mon pour-soi d'un goût *fade* et sans distance qui m'accompagne jusque dans mes efforts pour m'en délivrer et qui est *mon* goût, c'est ce que nous avons décrit ailleurs sous le nom de *Nausée*.<sup>1)</sup>

Roquentin の *réalité humaine* の真正さに直接触れたいという渴望は、*nausée* によって阻止される。「一個人」としての存在を保つ Roquentin は先ず、事物 *chose* に直面する時 *nausée* を体験する。*nausée* は正に体験であって、頭の中だけで作られた観念ではない。Roquentin に *nausée* の意味を啓示するのは、あの有名なマロニエの根に対する観察を通してである。

Donc j'étais tout à l'heure au Jardin public. La racine du marronnier s'enfonçait dans la terre, juste au-dessous de mon banc. Je ne me rappelais plus que c'était une racine. Les mots s'étaient évanouis et, avec eux, la signification des choses, leurs modes d'emploi, les faibles repères que les hommes ont tracés à leur surface. J'étais assis, un peu voûté, la tête basse, seul en face de cette masse noire

1) *L'être et le néant*, P. 404

et noueuse, entièrement brute et qui me faisait peur. Et puis j'ai eu  
cette illumination.<sup>1)</sup>

ここでは Roquentin は物を執拗に熟視している。彼の認識の根底を支えているのは「見る」という態度である。《LA NAUSÉE》において彼は首尾一貫して精巧な撮影機のように事物を見ている。彼が物を徹底的に見ると、物は物自体として存在するものとして自らを顕示する。すなわち物が自らの外皮として所有している「意味」や「使用法」や「目印」や「機能」を剥奪されることになるのである。その時、物が顕現するのは他ならない物そのものの「存在」existence である。存在とは何か。

Si l'on m'avait demandé ce que c'était que l'existence, j'aurais répondu de bonne foi que ça n'était rien, toute juste une forme vide qui venait s'ajouter aux choses du dehors, sans rien changer à leur nature..... l'existence s'était soudain dévoilée. Elle avait perdu son allure inoffensive de catégorie abstraite : c'était la pâte même<sup>1)</sup> des choses, cette racine était pétrie dans de l'existence.

純粹で無味乾燥な存在があらわになると、Roquentinの内面と外界の物との間に生理的な断絶が生じ nausée を催す。なぜならば、物に対して人が持っていた先験的な有効性が消滅することによって、恐怖感の中に何の拘束もなく投げ出されるからである。この恐怖感はいくつの相貌を持っている。その第一番目のものは、本来対自存在であるべき意識が、物と同化して即自存在となってしまう恐怖感である。第二番目には、物との関係において自らが「余計なもの」de trop であるという恐怖感——すなわち物が即自的に存在するためには自分は何ら存在する必要はないということ。第三番目には、物の巧利性を放棄することによって、物を使って何を仕出かすかわからないという恐怖感——すなわち物の価値の多様化による混迷。これらすべての根源

1) 《LA NAUSÉE》, P. 161

1) ibid P. 161—P. 162

にあるのが「不条理性」Absurditéである。従ってこれからは不条理性について検討しなければならない。

absurditéも nauséeと同様に、所謂「観念」ではない。absurditéは、言葉という媒介物を使わずに物に直接的に現前することによって体験できる具体的な現象であり、「存在」と nausée と「生命」とを明らかにするmot-cléである。

Et sans rien formuler nettement, je comprenais que j'avais trouvé la clé de l'Existence, la clé de mes Nausées, de ma propre vie. De fait, tout ce que j'ai pu saisir ensuite se ramène à cette absurdité fondamentale.<sup>1)</sup>

それではこの「根源的な不条理性」から導き出される不条理な事象の基本的な構造とはどのようなものであろうか。

Un geste, un événement dans le petit monde colorié des hommes n'est jamais absurde<sup>2)</sup> que relativement : par rapport aux circonstances qui l'accompagnent.

absurditéは人間と世界との「相対的な関係」の中に存在する。今の段階では不条理性は、人間と世界がそれぞれ raisonnable であり得ないことに由来すると言えない。

absurditéをもっと明らかにするためには、その代表的作家である Albert Camus における absurdité の意味を考察し、それに対して Sartre がどのような分析を加えているかを検討するのがここでは最も良い方法のように思われる。

先ず Camus が *Le Mythe de Sisyphe* において nausée を不条理な現象

1) ibid. P. 163—P. 164

2) ibid. P. 164



として捉えていることに注目すべきである。

Les hommes aussi secrètent de l'inhumain. Dans certaines heures de lucidité, l'aspect mécanique de leurs gestes, leur pantomime privée de sens rend stupide tout ce qui les entoure. Un homme parle au téléphone derrière une cloison vitrée; on ne l'entend pas, mais on voit sa mimique sans portée: on se demande pourquoi il vit. Ce malaise devant l'inhumanité de l'homme même, cette incalculable chute devant l'image de ce que nous sommes, cette <sup>1)</sup>《nausée》 comme l'appelle un auteur de nos jours, c'est aussi l'absurde.

Camus においても不条理は人間と世界との関係であるが、その関係の最大の特徴は *divorce* という情態を示す。人間と世界との理想的な形態は、両者の間に調和に満ちた婚姻関係が成立していることであるが、この関係に亀裂が生じた時、不条理が人間を襲うのである。人間を世界から引き離す最大の要因は言うまでもなく「死」である。この人間の持つ必然的な背理性が人間に生きる理由を与えるのであり、生命の源泉と成り得るものである。それと同時に人間の「非人間的な」要素をも生み出す。世界の実相は *humain* なものと *inhumain* なものとの全体的な総合のうちにある。不条理は世界の *inhumain* な側面を啓示する。

日常生活において人間の行為がその「意味」を喪失する時、「人間自身の非人間的なものを前にしての不快感」を我々は強く感じる。意味を遮断するものは言うまでもなく「不条理な壁」であるが、その不透明性が *étrangeté* という概念を導入する。世界に意味を見出せないという違和感がこの概念の最も大きな特性である。人間が突然、彼の住み慣れた世界が光と生命を見失った見知らぬ土地に感じられた時、彼の意識に *étrangeté* という概念が侵入したのである。この *étrangeté* という特徴を持ち、他の人間との間に *divorce* を生じさせる人間が正に *l'étranger* なのである。彼の意識に特有な力は、他者の前に自らの不可解な姿を現前させる。人間の行為はすべて自明なもの

1) Pléiade 版 P. 108

であるが、もし「ガラスの仕切り窓」が他人との間に捜入されると、その意味が不分明なものとなる。「ガラスの仕切り窓」は、一人の *étranger* と彼を取り巻く人々との間に半透明な幕として掛かる。その *étranger* の意識はこの幕にさえぎられて、彼が何をしているかは誰にでも分かるが、それが何を意味するのか判断できる人は限られている。このような特性を持った *étranger* の意識に対してなされた Sartre の指摘ほど適切なものはない。

En effet, le geste de l'homme qui téléphone et que vous n'entendez pas n'est que *relativement* absurde : c'est qu'il appartient à un circuit tronqué. Ouvrez la porte, mettez l'oreille à l'écouteur : le circuit est rétabli, l'activité humaine a repris son sens. Il faudrait donc, si l'on était de bonne foi, dire qu'il n'y a que des absurdes relatifs et seulement par référence à des «rationnels absolus». ..... entre les personnages dont il parle et le lecteur il va intercaler une cloison vitrée. Qu'y a-t-il de plus inepte en effet que des hommes derrière une vitre ? il semble qu'elle laisse tout passer, elle n'arrête qu'une chose, le sens de leurs gestes. Reste à choisir la vitre : ce sera la conscience de l'Etranger. C'est bien, en effet, une transparence : nous voyons tout ce qu'elle voit. Seulement on l'a construite de telle sorte qu'elle soit transparente aux choses et opaque aux significations.<sup>1)</sup>

ここで Sartre は、文学的技法における *absurde* と、哲学的な意味の *absurde* とを分類して解説している。*L'Etranger* の用意周到な構成と緻密な描写が、人間と世界の不条理性を示すためにこの上もなく貢献している。この観点からすれば、不条理が *L'Etranger* の「貼札」とはなっていないので、この作品が類いまれな成行を収めていると言えるのである。Camus の作品においては、抒情性が観念的なものを常に圧倒している。それは地中海的風土に育くまれた彼の鋭敏すぎるほどの情緒的な資質が、認識者として形而上学的なものに深入りするのをはばんでいるからである。しかし Camus

1) Explication de *L'ÉTRANGER*, *Situations* I, P. 115

にとって、彼の精神を統御する理智と情緒との均衡こそが全体的な真理に到達するための最良の方法だったのである。ところで彼の不条理についての認識によって世界を判定することができるだろうか。

Je disais que le monde est absurde et j'allais trop vite. Ce monde en lui-même n'est pas raisonnable, c'est tout ce qu'on en peut dire. Mais ce qui est absurde, c'est la confrontation de cet irrationnel et de ce désir éperdu de clarté dont l'appel résonne au plus profond<sup>1)</sup> de l'homme. L'absurde dépend autant de l'homme que du monde.

ここで Camus は理智の限界を規定している。理智の力が判定できることは、「世界それ自体は *raisonnable* ではない」ということだけである。なぜならば、人間は世界を構成している一要素だからであり、世界内存在として自らを全うする時、人間の条件を逸脱することはできないからである。この不可能性を克服する唯一の方法が、虚構の世界を創造することに委ねられる。そこで作者は神のごとき超越者となることができるし彼の透徹した眼力が人間と世界を完全に見透かすことによってその実像を捉えることができる。しかし人間は飽くまで無限な世界における有限な存在でしかない。一つの作品によって世界の一側面を把握し得たとしても、彼の内的要求が世界の別の側面を探究するように強要せずにはいられない。このように自らの問題意識が挑発するあらゆる課題を解明するのが、現代の思想的な作家の最大の使命である。Camus も Sartre も不条理という哲学的風土に生きたという点では同じ文学的題材を懐胎していたが、不条理についての認識において根本的な相違が見られる。すなわちここで注目すべきことは、Sartre の哲学者としての卓越した洞察力が、Camus の *absurde* の構造と世界を判定する能力の限界を見抜いているということである。

Mais il faut dire que la pensée moderne a rencontré deux espèces d'absurde. Pour les uns, l'absurdité fondamentale, c'est la《*facticité*》,

1) *Le Mythe de Sisyphe*, P. 113

c'est-à-dire la contingence irréductible de notre «être-là», de notre existence sans but et sans raison. Pour d'autres, disciples infidèles de Hegel, elle réside en ceci que l'homme est une contradiction insoluble. .... On songera sans doute à M. Camus, dont nous avons commenté le beau roman, l'autre mois. Mais pour celui-ci, qui n'a fait qu'effleurer les phénoménologues et dont la pensée se meut dans la tradition des moralistes français, la contradiction originelle est un état de fait. Il y a des forces en présence — qui sont ce qu'elles sont — et l'absurdité naît de leur rapport. La contradiction vient donc après coup. Pour M. Bataille, qui a fréquenté de plus près l'existentialisme, et qui lui a même emprunté sa terminologie, l'absurde n'est pas donné, il *se fait* ; l'homme se crée lui-même comme conflit.<sup>1)</sup>

Camus にあって不条理は彼自らが宣言している通り、彼の認識体系の「出発点」でしかない。彼の思想の生涯を通じての基調となるものは生命の讃歌である。すなわち自殺と殺人に伴う一切の nihilisme の断固たる拒絶である。 *Le Mythe de Sisyphe* を書いた時点において、不条理は「反抗」の契機となるものであった。不条理は人生の意味の無さに対する明察であるが、何ものによっても解消され得ない。反抗だけが、人生の意味の無さを逆手に取って生命の原理とすることができる。そしてこの背理性を正面きって生きるのが「不条理な人間」なのである。彼が演じるのは「地上の劇」であって、神秘的な超越者によって彼の明識が玩弄されることは決してない。彼が自らの根拠となすものは「人間の尺度」であり、彼の思想と行動は人間の条件に依存する。この観点からすると、Camus の思想体系が moralistes の系譜に連なるという Sartre の指摘は正鵠を得たものである。

Camus の absurdité が morale の領域へと発展するのに対して、Sartre の absurdité は存在論の領域で展開される。Sartre の存在論についての基本的概念の形成は現象学との出会いから始まる。

1) Un Nouveau Mystique, *Situations* I, P. 154—P. 155

..... c'était exactement ce qu'il souhaitait depuis des années : parler des choses, telles qu'ils les touchait, et que ce fût de la philosophie. Aron le convainquit que la phénoménologie répondait exactement à ses préoccupations : dépasser l'opposition de l'idéalisme et du réalisme, affirmer à la fois la souveraineté de la conscience et la présence du monde, tel qu'il se donne à nous. .... Il eut un coup au coeur en y trouvant des allusions à la contingence. Quelqu'un lui avait-il coupé l'herbe sous le pied ? Lisant plus avant, il se rassura. La contingence ne semblait pas jouer un rôle important dans le système de Husserl, dont Lévinas ne donnait d'ailleurs qu'une description formelle et très vague. Sartre décida de l'étudier sérieusement.<sup>1)</sup>

ここにおいて Sartre の頭脳で 醸成されていた哲学的な 課題が明確な形をとるに至った。すなわち、「意識」conscience と「偶然性」contingence の問題についての現象学的な追求である。これは《LA NAUSÉE》の主題と全く同一のものである。

L'essentiel c'est la contingence. Je veux dire que, par définition, l'existence n'est pas la nécessité. Exister, c'est *être là*, simplement ; les existants apparaissent, se laissent *rencontrer*, mais on ne peut jamais les *déduire*.<sup>2)</sup>

Sartre の発想の根には人間の条件を決定する量も重要な要因である *existence* が横たわっている。*existence* からすべての問題が核分裂的に発生する。人間の「実存」の基本的様式は、「偶然性」である。なぜならば、「実存するとは、ただそこにあることだ」からである。偶然性は根源的な *absurdité* より生じ、人間の存在を正当化するものは何もないという認識に基づいている。人間は何もののためでもなく生まれてきたのである。何ものかによってこの世界に遺棄されたのである。生きることにはいかなる理由もいかなる目

1) Simone de Beauvoir: *La Force de l'Age* (Gallimard, P. 141 — P. 142)

2) 《LA NAUSÉE》, P. 166

的もないという思念が人間を宰領する。偶然性は世界の根拠にいかなる必然も無いということを前提とするから、「完全な無償性」が最大の特性としてそこから生じる。先験的な意味の無い世界との関係において、人間の存在も先験的な意味を喪失する。もし世界に先験的な意味があるとしたならば、その意味を世界に附与する能力があるものは、人間の能力を超越した絶対者でなければならないだろう。すなわちそれは「神」以外の何者でもあり得ない。神こそが世界の根拠に必然性を与えることのできる唯一の存在である。しかし Sartre にとって「神は死んだ」のである。正に偶然性は神の不在に起因する。神のいない世界における意味の発見こそ、ニーチェ以後の思想家に背負われた最大の課題である。至上の存在者なしに生きることの可能性の限界を定めることが生きることの意味を生み出す。

神が死んだのと同時にキリスト教文明を支配していた価値観も崩壊したのである。既成の道德律や因襲や習慣が自らの桎梏を放棄することによって価値は多様化する。価値観の混迷した世界に神の創造しなかったものを刻印することが Sartre の敢然として試みたことである。

一方同じ状況に置かれた Roquentin はどうかというと、彼がどのような新しい価値を生み出そうとしているのかははっきりしない。彼は意味と価値をもぎ取られた世界に当てどもなく投げ捨てられている。世界の喧噪に満ちた猥雑な価値が彼を責め苛むが、彼は一種の沈黙で自らを武装するだけである。しかし彼の精神の働きが価値によって凝固させられることは決してない。なぜならば、彼にとって価値はその根拠を失っていることによって、彼の意識と相対的に常に彼の存在を超越するものだからである。この精神の飢餓状態が新しい価値を生み出すための必要条件なのであるが、Roquentin においてはその十分条件が可能態のまま留まっている。この可能性を汲み尽しそのすべてを生命として燃焼させることが、生きることの感触となるものである。しかし Roquentin の生命が灼熱することは決してない。

このような荒涼たる情熱の砂漠で彼は一見自由のように思われる。しかしながら、世界の偶然性とは本来的な自由にとって一つの落し穴である。自ら

を正当化し得ない存在の根拠の無さは、自由における 選択の 無動機性 を生み、行為について何らの指針をも見出せない。このような自由は本来的な自由とは瓜二つであるが、その限界の無さがいかなる行為をも可能にすることによって人間を不安に陥れる。Roquentin が落ち込んでいるのが正にこのような状況である。絶対的な自由を前にした不安が彼の生命を逡巡させているのである。存在の偶然性こそが本来的な自由を蝕むものである。

Je suis libre : il ne me reste plus aucune raison de vivre, toutes celles que j'ai essayées ont lâché et je ne peux plus en imaginer d'autres. .... Je suis seul dans cette rue blanche que bordent les jardins. Seul et libre. Mais cette liberté ressemble un peu à la mort.<sup>1)</sup>

絶対的な自由を克服して本来的な自由を獲得するためには engagement の思想に依存しなければならない。しかしこの思想は 《LA NAUSÉE》において少しずつ形成されつつあるが、まだ完成されていないことは明らかである。

次に 《LA NAUSÉE》のもう一つの大きな主題である「意識」の考察に取りかかることにする。Sartre にとって意識の最初の働きは、外的な対象物の正確な把握のために貢献することである。物質と観念とへの偏重を打破して外界の物の実体をつかむためには、意識と物との相互的な関係に依拠しなければならない。物は意識無くしてはその存在理由や意味や価値を失い、それと同様に意識も物無くしてはその存在理由を失う。なぜならば、物は意識に同化し得ないからであり、意識は常に「何ものかについての意識」だからである。

La conscience est conscience de quelque chose : cela signifie que la transcendance est structure constitutive de la conscience ; c'est-à-dire que la conscience naît *portée sur* un être qui n'est pas elle.<sup>1)</sup>

1) *ibid.* P. 196

1) *L'être et le néant*, P. 28

ここに至って意識に対して「超越」 *transcendence* という特権的能力が附与されたことによって、意識の基本的な構造がより一層明らかになったのである。意識が自らを超越することができるということは、意識が認識する力を携えていることに他ならない。すなわち認識とは、意識が自ら知りたいもの以外を無化することによって、そのものを個別化することである。認識において意識が超越するということは、意識と「物」 *chose* との和合と離反が代わる代わる繰り返されることである。もし意識と物とが和合したままであると意識は即自存在に墮してしまう。意識は決して物ではない。もし意識が物だとしたら、人間の認識は不可能になるだろう。意識が物でないということは、意識が自らのうちにいかなる実体も持たないということを意味する。従って認識の基本構造である *cogito* において、意識が「自我」を志向の対象にすることができるようになったのである。

ところで意識の対象が外界の事物ではなくて意識そのものに向けられた時、意識はどのような症状を呈するだろうか。この場合、反省する意識と反省される意識との相剋によってかなり複雑な様相を帯びるが、その中でも最も厄介なのが、人間の根源的な *absurdité* から生じる *mauvaise foi* である。この意識構造について Sartre は *L'être et le néant* で極めて鋭く分析しており、彼の現象学的な思想体系のうちでも最も独創的なものの一つである。この *mauvaise foi* が Roquentin の生活態度の中にすでに見出せるということに注目すべきである。

《LA NAUSÉE》は Roquentin の生活体験を介しての「実存の不安」の発見の書である。実存の不安は *réalité humaine* を正当化する根拠無くしては、何ものによっても解消され得ない。それにもかかわらず存在の偶然性に生きる Roquentin は自らの意識に「無」を挿入することによってこの不安を他に転化させようとする。彼の *mauvaise foi* 的な生活態度は現実の人間に対する無関心から生じる。彼にとって生きることの第一義的な意味は独学者と同様に、書物に対して現前することである。読むこと書くことによって自らの思念を完成させることが彼のほとんど唯一の存在理由である。彼に



としては現実の人間よりも書物の世界の人間の方がよりその真実味の輝きが増すように思われる。

M. de Rollebon était mon associé : il avait besoin de moi pour être et j'avais besoin de lui pour ne pas sentir mon être.<sup>1)</sup>

人間は不安からは決して逃避することはできない。なぜならば不安から逃れるためには、その不安の正体を明瞭に知っていなければならないからである。また不安から逃がれることが不安だということもあり得る。従って人間が存在している限り不安についての意識は常に人間に付きまとう。しかし人間は一時的に意識を眠らせてできるだけ不安を感じまいとする。このように同一の意識の中で存在と非存在という矛盾した概念が共存することが *mauvaise foi* の基本構造である。

..... si je suis mon angoisse pour la fuir, cela suppose que je puis me décentrer par rapport à ce que je suis, que je puis être l'angoisse sous la forme de «ne-l'être pas», que je puis disposer d'un pouvoir néantisant au sein de l'angoisse même. Ce pouvoir néantisant néantit l'angoisse en tant que je la fuis et s'anéantit lui-même en tant que je la suis pour la fuir. C'est ce qu'on nomme la *mauvaise foi*.<sup>1)</sup>

最も典型的な *mauvaise foi* 的生き方をしているのが所謂 *salauds* である。*salauds* とは何か。根源的な *absurdité* より生じる実存の不安に全く気付かずに既成の生活様式や考え方や *morale* に盲従して生きている人々、或いはたとえそのことに気付いていてもそれを隠蔽したり、それと馴れ合って生きている人々のことである。彼らは社会的な権威や既成の秩序や因襲を自らの生き方を正当化するための *alibis* として利用するという欺瞞の中に生きている。Roquentin が最も忌み嫌うのはこういった *salauds* である。

1) 《LA NAUSÉE》, P. 127

1) *L'être et le néant*, P. 82

一見 *salauds* 的な外観を呈していないが、*salauds* 的な欺瞞を内包している人間として *humaniste* がいる。伝統的な *humaniste* とは、人間と世界を「炭焼き」のように信じている人のことである。彼は現実を構成している重要な要素である根源的な *absurdité* から生じる *inhumain* なものに対する明視が常に曇らされている。彼の生活信条は人類全体に対する愛であるが、この愛は人間性に対する盲信のために単なる表象に過ぎないものとなっている。実存の不安が *humaniste* を戦慄させることは絶対にあり得ない。

これに対して *Roquentin* は *humaniste* ではないが、*humaniste* に積極的に敵対はしない。彼は *humaniste* の天使のような善良さに対して *nausée* を感じているだけである。彼は人生や人間性の皮相的な意味を信じていないが決して *pessimiste* ではない。それは彼が存在の偶然性に凝結してしまっはすべてが無意味だということを明晰な意識で見透かしているからである。

*mauvaise foi* 的現実の中で生きる *Roquentin* の自我の衰退を救済するのは、今のところ *M. de Rollebon* のような書物の中の人物だけのように思われる。*Roquentin* は自らの存在の根拠の無さを *Rollebon* の存在に転嫁することによって彼の存在の根拠を発見しようとする。しかしこの試みもせいぜい彼の不安を他の存在によって糊塗するだけである。一方 *Rollebon* も *mauvaise foi* の構造の中では、*Roquentin* に自らの存在を貸与することによってその代償として歴史の中から蘇生することはできない。従って *Roquentin* はこの上もなく味けない生命の代替物を甘受しなければならない。それでは彼にとって彼の全生命を蕩尽するほどの存在の喜びとは何か。彼は自らの生命に関わりあるような野心を持ち得るだろうか。彼は《LA NAUSÉE》の終りで次のように告白する。

Est-ce que je ne pourrais pas essayer..... Il faudrait que ce soit un livre: je ne sais rien faire d'autre. Mais pas un livre d'histoire: l'histoire, ça parle de ce qui a existé — jamais un existant ne peut justifier l'existence d'un autre existant. Mon erreur, c'était de vouloir

ressusciter M. de Rolebon. Une autre espèce de livre. Je ne sais pas très bien laquelle — mais il faudrait qu'on devine, derrière les mots imprimés derrière les pages, quelque chose qui n'existerait pas, qui serait au-dessus de l'existence. Une histoire, par exemple, comme il ne peut pas en arriver, une aventure. Il faudrait qu'elle soit belle et dure comme de l'acier et qu'elle fasse honte aux gens de leur existence.<sup>1)</sup>

彼の実存の不安は「書くこと」という一種の回心によって救われることを目ざす。しかし書物の世界を支配するのは飽くまでも *imagination* であるから、想像的なものと現実的なものとの葛藤が新しい *mauvaise foi* を生み出す。書くことにおいてこの *mauvaise foi* から脱出する唯一の手段は、現実的なものと非現実的なものとの調和にあるが、人間の「存在することの罪」<sup>2)</sup> *le péché d'exister* がその調和を打ち砕く。なぜならば、*mauvaise foi* は *réalité humaine* の意識構造に包摂されているものだからである。

結局、《LA NAUSÉE》は、人間が生きることの意味——すなわち *réalité humaine* の真正さを獲得することであるが——その意味を把握する時の充実感を感じることが、根源的 *absurdité* より生じる「偶然性」に疎外されて不可能であるということを証明した作品である。この荒涼たる *nausée* の砂漠から脱出する道は全く閉ざされているのだろうか。いや、正当な手段がただ一つだけ残されている。それは、我々の存在を根拠付けると同時に存在の無償性から生じる絶対的自由の空虚さを超克して真の自由を獲得する *engagement* の思想に他ならない。この思想を明らかにするためには、新しい「物語」が創られ、新しい研究論文が書かなければならない。

1) 《LA NAUSÉE》, P. 221—P. 222

2) *ibid.* P. 221